

巻頭言

むかしも今も

株式会社 日本輸出自動車検査センター はや かわ やす ひろ
早 川 泰 弘



本誌 72 巻 8 号 (2018 年) の巻頭言「半世紀を迎える都道府県の残留農薬分析」(中村幸二植物防疫協会技術顧問執筆) を感慨深く拝読した。これを機に、半世紀とまではいかないが、筆者が農水省に入省した 1980 年 (昭和 55 年) から退職した 2015 年 (平成 27 年) までの 35 年間の農業、組織、植物防疫 (農薬含む) の変化について思いを巡らせてみた (紙数の関係で一部にとどまったことをご容赦願いたい)。農業全体の変化の概略を統計データで見ると、耕地面積：546 万 ha → 450 万 ha (82%)、作付面積：571 万 ha → 413 万 ha (72%)、農業就業人口 (自営農業)：697 万人 → 210 万人 (30%)、農業総産出額：10.8 兆円 → 8.8 兆円 (86%) となり、大幅に縮小してきたことがわかる。このような状況を背景に農水省の組織もこの 35 年で大きく変わった。2001 年 (平成 13 年) の省庁再編の際にはそれまで五つあった局が四つに再編・縮小された。さらに翌年に発生した BSE と無登録農薬問題を契機として、2003 年に食糧庁が廃止され消費・安全局が創設された。農林水産行政が生産重視から、より食料産業、消費・安全重視にシフトした転換点である。農業について見ると、35 年間で、出荷量：684 千 t/kl → 228 千 t/kl (33%)、出荷額：3.2 千億円 → 3.7 千億円 (114%) となった。出荷量が大幅に減少しているにもかかわらず出荷額が増えているのは、高付加価値化などにシフトしているからであろう。世界の農薬メーカーも、1980 年当時販売額ベースで上位 16 位までは欧米のメーカーだったが (1 位バイエル、2 位チバガイギー、3 位シュエル、4 位モンサント、5 位ローヌプーラン)、1990 年代以降急速に M&A が進み、2015 年には、シンジェンタ、バイエル、BASF、ダウ・ケミカル、モンサント、デュボンの 6 社になった。さらにこれにとどまらず、2017 年にはダウ・ケミカルとデュボンが経営統合によりダウ・デュボンになり、シンジェンタは中国化工 (ケムチャイナ) に買収され (ただし、「シンジェンタ」の社名は継続)、2018 年にはモンサントがバイエルに買収される (「モンサント」の社名は消滅) 等、1980 年当時の感覚では信じられない状況が生じている。

このような大きな変化の中にあっても変わっていないものについても考えてみた。例えば農水省の組織で見ると、「植物防疫課」。同課は 1951 年 (昭和 26 年) に発足し現在に至るまで 68 年間存続している (農薬対策室は 1982 年の発足以降 37 年間)。筆者が入省した 1980 年に

は、植物防疫課は農蚕園芸局に所属していたが、当時同局に所属していた全 10 課 (そのうちの 3 課は蚕関係の課) のうち、現在も同一名称で存続しているものは植物防疫課のみである。都道府県の植物防疫関係組織も縮小などはあったものの存続していると聞いている。さらに、植物防疫関係団体も、それぞれ発足以来現在まで同様である。その理由としては、①植物防疫や農薬は農業技術分野および行政分野として比較的独立しており、他の要因 (営農形態や農業施策の変化等) の影響を受けにくかったこと、②施策の一部が植物防疫法や農薬取締法という法律に基づき明確に定められていること、等のハード面が考えられるが、それ以上に重要なのは、③関係機関と生産現場が一体となって、現場の新たな課題・ニーズを把握し、それに対する現実的な対応を地道に行ってきたというソフト面があったからだと考えている。本誌が月刊誌として 73 年間継続して、質・量ともに高水準の記事を提供し続けているということもその証左であろう。さらに、あまり変化がなかったものとして、日本の農薬メーカーの状況も挙げられる。35 年余における世界の農薬メーカーの劇的な変遷の中で、日本の農薬業界では、一部再編などが見られたもののメーカー数・社名については、これまでのところそれほど大きくは変わっていない。近年のグローバル化の嵐の中でこの事実の特筆すべきことではないか。それについてはいろいろな分析があるが、世界の巨大メーカーと比べ経営資源などが限られる中で同等の高い水準の研究開発力を維持しつつ、日本農業特有のきめ細かな現場のニーズに対応した農薬開発 (製剤技術、散布技術等を含む) を継続してきたことが大きな要因の一つと考えている。

35 年間でこのように振り返ったとき、あらためて時の流れを痛感する次第であるが、多くのものが変わる中で、「現場のニーズを的確に捉え、現場のリアリティを大切にしつつ、地道に歩む」という変わらないもの・変わるべきでないものが、植物防疫では一貫して受け継がれてきたということに対する思いをあらたにした。また、植物防疫の仕事に多少なりともかかわった者として今後もそうあってほしいと願っている。なお、本稿のタイトルは山本周五郎の同名の小説から拝借した。江戸の職人の人情を綴ったものであるが、そこに描かれた主人公の一途な生き方が、重なったためである。

(日本植物防疫協会 理事)